

国立競技場を改修して未来へ

「神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会」の運動経過とそこから見えてくるもの

日置圭子

ひおき・けいこ
地域文化企画コーディネーター
株粋まち代表

「神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会」共同代表

巨大なUFO

2013年9月7日、2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定し日本中が沸き立つ中、「2020年はこの競技場で！」と突然、宇宙から神宮の森に降りてきた巨大なUFOのような建造物がテレビ画面に映し出されました。前年のコンクールで決まっていたという、イラク出身でイギリス在住の女性建築家ザハ・ハディド氏デザインによる巨大な国立競技場。これを見た途端、私の頭の中のセンサーが「これはだめ。取り返しがつかないことになる」とさかんに警告シグナルを発したのです。

それは、私が十数年関わって

きた東京・神楽坂のまちづくり活動の中で身につけてきたセンサーかもしれない。ヒューマンスケールの路地と坂の街として人気の高い神楽坂ですが、そのまちづくりは長年、外濠埋め立て再開発や超高層マンション計画などの戦いの連続でもありました。戦っても建ち上がりまう巨大建造物。それでもまた次と戦いながら、ぎりぎり守り続けている路地空間。

建築家でもない普通の人には、単に鳥瞰図やデザイン画を見ただけでは、人間の視点から見上げたときの押し寄せるような圧迫感、気持ちよく広がっていた青空が切り取られ、風の道が遮られる閉塞感は想像できないも



2012年11月に国際デザイン・コンクールで選ばれた新国立競技場最優秀案（デザイン／ザハ・ハディド）

の都市のあり方に大きな影響を与える重大な問題なのではないかと、直感的に思ったのです。

「神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会」結成

その後、すでに2013年8月に世界的な建築家である槇文彦さんがこの新国立競技場計画のためのデザイン・コンクールに対して、「新国立競技場を歴史的文脈の中で考える」(『JIA MAGAZINE』)という論考を発表し、財政、景観、安全、市民生活といった点からも非常に大きな問題があることを指摘されていることを知り、私の漠然とした危機感も徐々に明確なものになり始めていました。

そんな中、槇さんの問題提起を受けて作家の森まゆみさんはじめ何人かの有志が集まって、新国立競技場計画について議論するから参加しませんかという誘いを、住宅や景観問題に関わってきた友人から受けたのが10月28日のことでした。

集まったのはほかに、歴史的建造物の保存や活用の運動経験

の。実際に建って初めて、しまった、と思っても失われてしまったものはもう取り返しがつかない。そして、その取り返しのつかなさにもいつか慣れ、その土地とそこで生きた人たちが脈々と紡いできた景観、歴史、文化が永遠に失われていく。それは、決して幸せなまちづくりではないことを痛感してきました。この巨大なUFOの鳥瞰図を見たとき、私はいま起きようとしていることは単に神宮外苑だけの問題ではなく、今後の日本

「神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会」 共同代表

大橋智子 (大橋智子建築事務所)
上村千寿子 (景観と住環境を考える全国ネットワーク)
酒井美和子 (デザイナー・まちまちnet)
清水伸子 (一般社団法人グローバルコーディネーター)
多田君枝 (『コンフォルト』編集長)
多兎貞子 (たてもの応援団)
日置圭子 (地域文化企画コーディネーター・粋まち代表)
森 桜 (アートコーディネーター・森オフィス代表)
森まゆみ (作家・谷根千工房)
山本玲子 (全国町並み保存連盟)
吉見千晶 (住宅遺産トラスト)

豊かな女性陣で、神楽坂でも文化企画に携わってきた私がどこまで力になれるかはわかりませんが、「これを狭く建築業界や建築家の論議にとどめるのではなく、市民の活動にしていきたい」「私たちの税金を使って、こんな次世代のツケになるような建物を建てさせるわけにはいかない」などさまざま出された意見に共感し、ともに活動していくことにしました。

代表となり、「神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会」が結成されました。

「改修」を掲げる

結成翌日から私たちはでき得ることを片っ端から行動に移していきました。一人それぞれが持つ多様な能力、人脈、経験などが組み合わさり、相乗効果を発揮できるのが私たちの強味です。

まずは、問題点を明らかにしていくために建築や法律の専門家などから学ぶことで、①風致地区の一五m、高度地区二〇mの制限を逸脱した高さ七〇mを可とするなど、デザイン・コンクール審査過程の不透明さ②巨大な競技場が神宮外苑の銀杏並木や絵画館などの景観におよぼす影響③明治天皇の葬儀を行った神宮外苑がスポーツのメッカとなり、雨の学徒出陣壮行会、1964年のオリンピックと歴史を紡いできた土地の記憶の軽視④当初予算一三〇〇億円を大幅に上回る建設費三〇〇〇億円(その後一八〇〇億円に縮小さ

れた後、現在は一六九九億円)という巨額な税金負担⑤八万人のスタジアムを年間四八日間イベントなどで埋めるという利用計画の甘さ⑥都営霞ヶ丘アパートの住人を立ち退かせる住民無視、といった数々の「なぜ?なぜ?なぜ?なぜ?」が浮かび上がってきました。

「改修」にこだわったのは、オリンピック開催が決まったからには、今後世界のトップを切っけて人口減少社会に突入する日本が、真に世界から尊敬される成熟社会を形成していくことに貢献するオリンピックにしたい。その答えが、日本の高い技術力をもって、モノを大切に使い続



現・国立競技場 (撮影: 清水襄、2013年12月-2014年5月)



明治神宮外苑（撮影：清水襄、2013年12月-2014年5月）

ける「もったいない精神」を活かした「改修」を行うことである。私たちは論点をそこに定めました。新築が被災地への資材・人材を奪うことにも繋がるという問題意識もありました。

経済効率性を金科玉条とする成長社会がすでに限界を見せ始めている今、巨大なハコモノを新築する二〇世紀型のスクラップアンドビルド社会のメンタリティ自体を変えていかなければ、われわれは未来の世代に多大な

負荷を与えることになる。新国立競技場問題はその重要な試金石となるのではないか。このスタンスはその後の運動の確固たる土台となっていきました。

市民運動の展開

ホームページも開設し、共同代表各自がメールやSNSなども活用しながら賛同者を集め、三週間ほどの間に一六〇〇筆の賛同署名が集まりました。この署名を添えて、11月25日には、



外苑ウォーク (1)



外苑ウォーク (2) (写真提供：ココログ)

「手わたす会」として、内閣府、文科省、日本スポーツ振興センター（JSC）/国立競技場を管理・運営し、国際デザイン・コンクールを実施した機関）、東京都を訪問し、要望書と質問状を提出、都庁記者クラブで記者会見も行いました。

また、この問題についての情報・知識を広く市民に共有してもらい、運動の裾野を広げるために、同日夜には建築、建築史、法律の専門家が登壇しての公開

座談会を開催し、インターネットで生中継、さらには論議の内容をのちに『異議あり！新国立競技場』（岩波ブックレット）として出版するなどの手立ても講じました。

さらに、新国立競技場の圧倒的大きさを多くの方に体感してもらいたいという趣旨から、「神宮外苑ウォーク」も11月30日を皮切りにこれまでに数回開催しています。

市民運動としての広がりとい

公開勉強会・シンポジウムの登壇者

2013年

11月25日 公開座談会「市民とともに考える新国立競技場の着地点」
 発言者：松隈 洋（建築史家、京都工芸繊維大学教授）
 藤本昌也（建築家、日本建築士会連合会名誉会長）
 日置雅晴（弁護士、早稲田大学大学院教授）
 平良敬一（建築評論家、『住宅建築』相談役）
 渡辺邦夫（構造設計家、新国立競技場デザイン・コンクール応募者）
 森山高至（建築エコノミスト）
 森まゆみ（作家、神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会共同代表）／司会
 会場：日本建築家協会・建築家会館本館1階・ホール

2014年

1月14日 公開勉強会「みんなで学ぼう 新国立競技場のあり方」
 登壇者：鈴木知幸（元2016年東京オリンピック招致準備担当課長）
 沖塩莊一郎（日本ファリテマネジメント協会理事、東京理科大学名誉教授）
 森山高至（建築エコノミスト）
 山本想太郎（建築家、日本建築家協会デザイン部会長）
 森まゆみ（作家、神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会共同代表）／司会
 会場：日本建築家協会・建築家会館本館1階・ホール

2月18日 公開勉強会「スポーツ施設としての新国立競技場を考えよう」
 登壇者：後藤健生（スポーツジャーナリスト）
 鈴木知幸（元2016年東京オリンピック招致準備担当課長）
 今川憲英（外科医的建築家憲+TIS&Partners' 東京電機大学教授）
 森まゆみ（作家、神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会共同代表）／司会
 会場：日本建築家協会・建築家会館本館1階・ホール

3月24日 公開勉強会「新国立競技場、このままでほんとうにいいの？」
 登壇者：松原隆一郎（社会経済学者、東京大学教授）
 柳沢 厚（日本都市計画協会理事、C-まち計画室代表）
 横河 健（建築家、日本大学教授）
 今枝秀次郎+平山貴大（東京大学工学部建築学科3年）
 森まゆみ（作家、神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会共同代表）／司会
 会場：日本建築家協会・建築家会館本館1階・ホール

5月12日 シンポジウム「新国立競技場のもう一つの可能性」
 登壇者：中沢新一（人類学者、明治大学野生の科学研究所長）
 伊東豊雄（建築家、RIBAゴールドメダル、プリツカ-賞受賞者）
 森山高至（建築エコノミスト）
 松隈 洋（建築史家、京都工芸繊維大学教授）／司会
 会場：津田ホール

6月15日 緊急シンポジウム「神宮の森から新国立競技場を考える」
 登壇者：横 文彦（建築家）
 原科幸彦（千葉商科大学政策情報学部長、元IAIA(国際影響評価学会)会長）
 三上岳彦（帝京大学教授、首都大学東京名誉教授）
 森山高至（建築エコノミスト）
 大澤昭彦（東京工業大学）
 森まゆみ（作家、神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会共同代表）／司会
 権上かおる（環境問題研究者）／司会
 会場：日本建築家協会・建築家会館本館1階・ホール



第2回公開勉強会（2014年2月18日）

う点では、ネット上で賛同者を集める社会改革活動支援プラットフォーム「チェンジオルグ」との出会いも重要なものでした。11月末から当会もキャンペーンをはることで一気に賛同者が増え、2014年8月末現在で海外からも含めて三万三〇〇〇筆近くの署名が集まっているのは、チェンジオルグに依るところ大です。

さらには、オリンピックの klaus ースラローム競技場の建設予定地である葛西臨海公園の自然環境を守ろうとしている方々や、神宮の競技場周辺住民の方々から意見を聞き、互いに連携することで、運動のネットワークも広がっていききました。こうして市民運動を進めていく中、自民党の無駄撲滅チーム（河野太郎座長）がJSCへのヒアリングで計画の杜撰さを厳しく追求したり、新聞や雑誌、専門誌などでも国立競技場計画の問題点がちらほら取り上げら

られたりしてはいたものの、当会の問題提起はまだまだ大きなうねりをつくっていくようなものにはなっていないませんでした。その原因の一つに、当初から国立競技場問題では建築界の論議が先行し、スポーツ、文化、施設、環境など多角的な面からの議論の不十分さがあることに、私たちも気づき始めていました。

2016年のオリンピック招致を担当した鈴木知幸さんから、「スポーツ施設としての国立競技場」という根源的な話を聞く機会を得ました。世界的に見ても競技場としては破格の約一七〇〇億円、それが実際には材料や人件費の高騰などで二〇〇〇億円ではすまないだろうとされる巨額な総工費の主な原因は、単なるスポーツ施設とせずショービジネス用途も混在させたことにあると鈴木さんは指摘しま

す。まさに目からウロコでした。

JSCは収益を上げるためと称して、ショービジネス目的に競技場全体に開閉式屋根をかけたが、陸上、サッカー、ラグビーなどの競技場なら本来屋根は観覧席にあればよい。屋根で覆うことで競技場は巨大な温室と化して空調が必要になり、天然芝の育成のために送風機を一〇台回し、太陽光に代わる照明を当てるなど、悪循環ともいえる重装備と巨額の建設費がかかる。JSCはイベント収入五〇億、維持管理費四六億で年間四億の赤字と試算するが、そもそも八万人収容のスタジアムにどれほどのイベント需要があるのか根拠も不確か。ショービジネス前提の全天候型にしなければ、建設費も維持費も大幅抑制できるはずなのに、屋根をつけることで次世代へ大きなツケを払う施設になっている。まさにカネが先かスポーツが先か、何のための施設なのかわからない倒錯した事態になっていることを、私たちは鈴木さんのお話から知りました。

鈴木さんには、2014年1

月14日の公開勉強会「みんなで学ぼう 新国立競技場のあり方」でもお話しいただき、さらに私たちも持続可能なスポーツ施設とはどうあるべきなのかに目を向けるべきと考えて、2月18日には、スポーツジャーナリストの後藤健生さんなどが登壇の公開勉強会「スポーツ施設としての新国立競技場を考えよう」を開催しました。ここでは、現在世界的に見ても陸上・フットボール兼用スタジアムは時代錯誤で、用途限定した専門施設の建設が主流。新国立競技場計画は利用するスポーツ関係者にとっても決して望ましいものではないことをさらに知ることとなります。当会としては、スポーツや施設関係者もつと発言するべきだと思つと同時に、そういう声が上がらない「見えない壁」的なものも感じざるを得ないのでした。

「アジェンダ21」

その後3月には、舛添都知事に計画見直し要望書を提出。ま

た、社会経済、都市計画、建築の専門家から市民の意思が無視されたまま進む計画への厳しい指摘がなされた公開勉強会「新国立競技場、このままでほんとうにいいの？」も開催しました。そうした中、私たちはもう一つ重要な論点に注目し始めました。

リオ・デ・ジャネイロの環境サミットを踏まえ、環境を守るために1999年に制定された「オリンピック・ムーブメント・アジェンダ21（行動計画）」です。これを読み込んだ私たちは、カネまみれと揶揄されることもあるオリンピックに実は高邁な精神が込められており、IOC（国際オリンピック委員会）がその遵守を開催都市に求めていることを根拠に、私たちの主張に説得力を持たせることができると思いました。

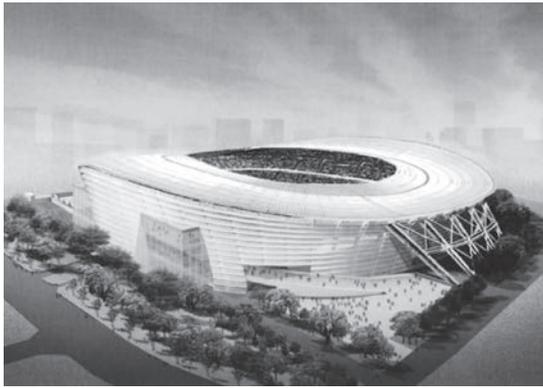
「競技施設は、土地利用計画に従って、自然か人工かを問わず、地域状況に調和してとけ込むように建築、改装されるべきである」(3.1.6)「既存施設を修理しても使用できない場合に限り、新しくスポーツ施設を建造する

ことができる」(3.2.2)と明記されており、これを遵守すれば、地域の風致を壊すような巨大な競技場は建てられないはず。当会は3月末、JOC（日本オリンピック委員会）とトーマス・バツハIOC会長に、それぞれ「アジェンダ21」遵守の要望書を提出しました。これに対し2カ月後IOCから「貴会はJSCと話し合つて、彼らの計画のさらなる詳細を請求することを勧めします」という回答がありました。JSCの計画は「アジェンダ21」に明らかに違反しているので、差し迫った現競技場取り壊し中止命令をくだすよう、反論の二度目の手紙を送りました。

伊東豊雄改修案から 一気に盛り上がり

改修を主張する当会にとつては、7月に現国立競技場が解体されるのを阻止することが喫緊の課題でした。それには改修が現実的なものであることを示すことが必要です。

実は、2011年にJSC自



久米設計改修案（提供：JSC）

体が改修案を久米設計に発注していたことが情報公開申請によって明らかになっており、ここでは収容人数を七万人以上に増やし、地下にサブトラックを設けた改修が七七七億円で可能だとされています。

そこで、当会とも意見交換を続けていた人類学者の中沢新一さんの「今こそ、立ち止まってこの計画を考え直そう」という問題提起を受けて、建築家の伊東豊雄さんが5月12日、シンポジウム「新国立競技場のもう一

つの可能性」において改修案を発表し、中沢さんとともに現計画以外の可能性を探る議論を行いました。

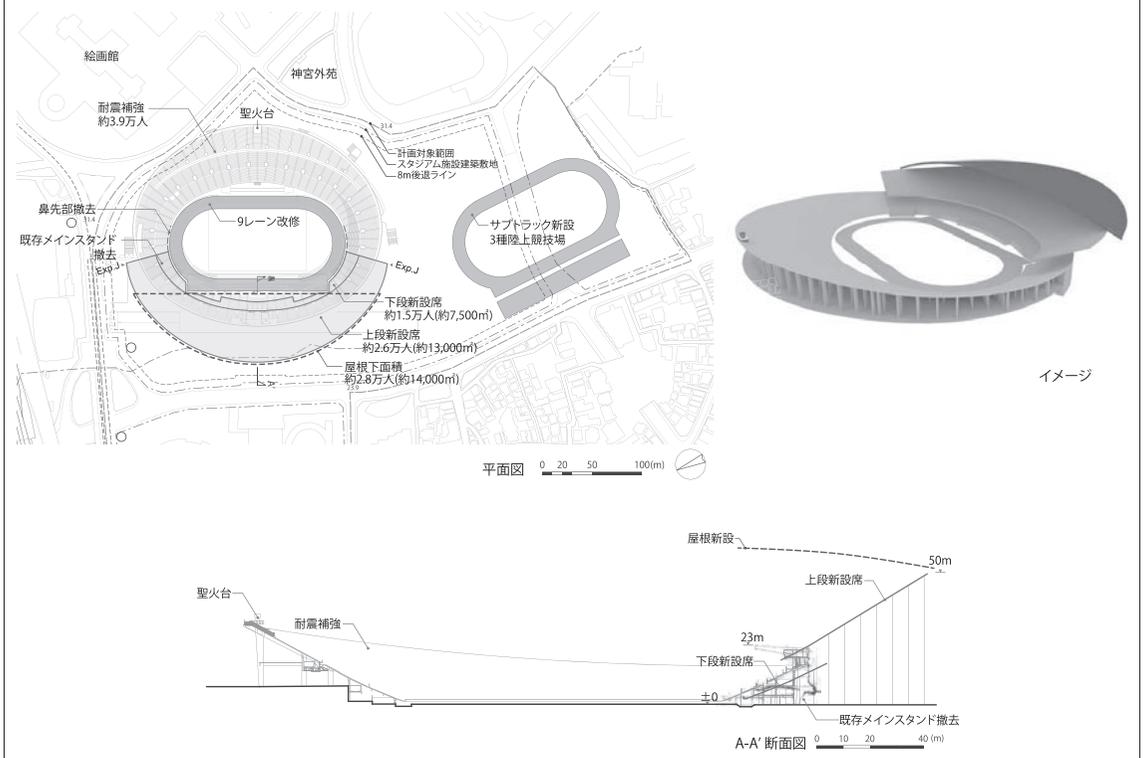
世界的建築家の伊東さんの改修案発表は、多くのメディアが取り上げ、当会の運動も一気に手応えを感じるようになりました。私たちも5月21日には都知事に、6月には文科省、東京都、JSCの関係部署に、解体中止と改修検討を求める緊急要望書を提出しました。

6月に入ると全国紙はもちろんのこと、東京から離れた地方紙にも新国立競技場計画への批判的記事が続々掲載されました。さらに6月10日、舛添都知事が、国立競技場は含まないものの東京都のオリンピック会場場の見直しを表明し、同日、JSCの解体工事入札が不落で解体開始延期が余儀なくされたことが発表されました。運動の潮目が変わったとも言える日でした。

その三日後の13日には、外国人記者クラブにて「東京大惨事を回避するには——国立競技場問題の解決策」と題して開催さ

つた。私たちが5月21日には都知事に、6月には文科省、東京都、JSCの関係部署に、解体中止と改修検討を求め緊急要望書を提出しました。

バックスタンドを残したメインスタンド建替え増設2段案



伊東豊雄改修案



2014年5月に発表された新国立競技場の基本設計案（提供：JSC）

ている実感も出てきました。

7月には、JSCが建築家を対象とした建て替え説明会を非公開にするとしたことを、NHKやTBSなども報道するなど、この時期、新聞や雑誌にも「負の遺産」計画の問題点を指摘し計画見直しを求める論調、計画の迷走ぶりを伝える記事が次々登場していました。

そんな中、2012年のデザイン・コンクール審査過程を情報公開請求で入手した資料が東京新聞で明らかにされ、すでにコンクール審査の時点で、ハデイド氏のデザインをめぐる景観や多額の建設コストなどへの懸念が指摘されていたことが判明しました。でありながら、最終的に「懸念が先行するのを避けたい」とマイナス評価の公表を控えるやりとりがなされ議論は深まらず、安藤忠雄委員長への一任でハデイド氏の最優秀賞が決定したのです。

市民の声を反映させるために

なぜ曖昧な議論のままの審査結果が通り、問題点を指摘する

専門家、そして市民の声が反映されずに、「決まったこと」として計画が粛々と進んでいくのか。一旦トップが走りだすと国の根幹にも関わるような政策にも市民の意思が反映されない。日本の政策決定プロセスの根源的欠陥がもろに露呈したとしかいいようがありません。

2007年の「スポーツ立国宣言」、2009年のラグビーワールドカップ開催決定、2011年の超党派ラグビーワールドカップ議連による国立競技場の八万人スタジアムへの建て替え決議、それに続く、オリンピック招致やスポーツ庁の設立が盛り込まれた「スポーツ基本法」施行という、一連のスポーツ国家戦略の流れの中で、この新国立競技場計画が進められているのでしょうか。私たち市民は、ハデイド案が目の前に突きつけられて初めて、事の重大を知ることになりました。それで初めて気づく市民の方が悪い、いまさら遅い、という声も多々聞かれます。しかし、アリのバイのよ

うに国民に知らせたという形だけでは整えても、意見が反映されるシステムは実質的ではない。あったとしてもそれを市民が活用するには、多大な時間とエネルギーを使わなくてはならないのです。

私たちにできることは、今からでも遅くないと信じて、コスト、環境への影響、スポーツ施設としての欠陥などについてさらに学び、この閉じられた政策決定のプロセスに風穴を開けていくことではないでしょうか。そして、実際にこの「負の遺産」を我が事として背負っていかなければならぬ若者たち、子どもたちにこそ現国立競技場を守る必要性を知ってもらいたい。

昨年この運動を始めた頃から比べれば、運動のうねりは確かに大きくなりました。しかし、これを書いている8月現在、計画が撤回される兆しはありません。それでも私たち「手わたす会」は、知ろうとしない、伝えようとしなないことは未来世代への「罪」だと認識し、これからも市民の前に問題を明らかにし続けていきたいと思っています。